

〔翻 訳〕

『スペクテイター』(51)

——第480号から第489号——

門 田 俊 夫

第480号 1712年9月10日（水曜日）

【ステイール】

誰が愚かな喜びの魅力に抵抗できるか。意志薄弱なものは

これに逆らっても無駄で、傷つくだけだ。

完全な円形状にぎっしり寄り集まっているのだ。(ホラティウス)¹⁾

先日、以前触れたことがあるフランスの強大なファラモン王の人柄と親友ユークラットとの関係を物語る昔の稿本に目を通していたとき²⁾、ユークラットが保管している手紙の中に、ファラモン王宛のある田舎の紳士からの書簡が入っているのに気づきました。それは出仕を辞退する旨の内容でした。この紳士は以前出仕していたことを満足に思っていますが、つぎの手紙を書いている時点では、余暇があり熟考したことによって、多忙な生活を送っていたときとはまったく違った考えを持つに至ったようです。

ファラモン王宛のシェリュイ氏の手紙

謹啓

小生を宮廷に呼び寄せたいとの（陛下の親友ユークラット様にかこつけて同封された）陛下のお手紙を拝見しました。この身に余る光栄は、陛下ご自身のためというよりはむしろ小生へのご配慮からなされたものと理解します。そこで、これをお断りする理由を述べさせていただきます。小生の出仕を望まれる陛下のご意志は小生の幸せを願ってのことですので、小生の罷免は関係ないとお考えいただけますと、小生のことはそっとしておいていただけるものと考えます。出仕したいという大望を抱く人々は、必ず、己の人柄と才能が宮廷のためになり、彩りになると考えます。そうでなければ、利得つまりいわゆる名誉を獲得したという率直な欲求から、しきりに主人の寛大さによって与えられた機会をつかもうとします。しかし、小生は陛下にこういった強要をすることはございません。そこで、陛下に打ち明けますが、小生はいつも通りの一人住まいと生活を洗練するということには

1) ホラティウス『諷刺詩』2.7.85-86

2) ファラモンとユークラットについては、第76号、第84号、第97号参照。

無縁の人たちとの長い会話をすることで、陛下の領土内で最も質実な人物となっているのです。進んで移動し、周囲の人たちに即座に愛想を振りまき、大勢の前で気楽に振舞えない人たちは、完全に小生を見捨てています。自身のことに関しては、てきぱきとその能力を享受するために、大切に扱わざるを得ない単なる機械だと思っようになっています。念のために申し上げておきますが、この土くれの住みかは数年もすれば家の道具よりもみすばらしい土になります。実際のところ、小生はしきりに以上のようなことを考えていますので、小生がどんなに素晴らしい客人になれるか陛下は容易に想像なされるに違いありません。加えて、欲求のない人物が寛大なファラモン王のために出来ることは何一つございません。ムッシュ・ユークラットがほのめかすには、陛下が小生に肩書きを付けようとしておられるとのことです。小生自身に関しては、現在の心境からしますと、名誉の称号は付き合いの邪魔になるだけで、周りの人たちの小生に対する新たな振る舞いによって、小生は人間関係で戸惑いを覚えることになります。これもまたお伝えして置きますが、陛下がお尋ねくださった子供たちは全員人柄も才能も平凡です。相続人の長子の資産は、快く享受できるだけのものはあります。小生の自己愛はさほど強烈ではなく、(小生の縁戚関係だというだけの)人を際立った地位にまで昇進させたいという気にはなれません。彼らは人々のためにも自分自身のためにも無名であるべきなのです。寛大な王様、陛下は名誉と地位を授けることが可能ですので、それにふさわしい人材に陛下のお力を使って欲しいと考えます。そうしていただけますと、高潔なファラモン王は若者の熱意にその能力で報いることになります。

長所がなくて好意を受け入れる人たちは、陛下に迷惑を掛ける形で、自己保身に走ります。陛下、言わせていただきたいのですが、田舎にいる私たちが「大権」という言葉をしばしば耳にする理由はここにあるのです。人々のためにすぐ使えるようにと陛下ご自身が留保されている法律を、取るに足らない連中は自身の愚行や不品行を隠蔽するために、絶えず私たちの耳にささやきかけているのです。どのような頻度でまたどのようなケースで長官に大権を主張することを許されるのか、ユークラットから知らせていただけますと、陛下の小生に対する格別の引き立てはさらに一つ追加されることになります。陛下の領土内の役人はトップから最下位に至るまで、「大権」という言葉を隠れ蓑にして自分たちの立ち居振る舞いが尋問にかけられないですむのです。高潔なファラモン王、できればお役人のどなたかお一人でも立派で慈悲深いことで大権を主張なさるのを見たいものです。いつになったら大権が病人を助け、無実の人を救い、見知らぬ人を慰めるために行使されるのでしょうか。明らかに立派な目的を達成するための方法は異常であっても、権力は決して不公平なものにはなりません。腹藏なく申し上げますと、陛下の気高いお心は親交をお認めなさっている全員が分かっていることです。

さて、陛下のお手紙に戻りますが、栄誉というものは人前に出る人には有益だと思います。わが城の君主になるのは夢見がちな愚の骨頂に過ぎません。世間と離れている人物にとっては立派な行いについて思いを馳せることほど名誉なことはありません。善行を大切にする人は自分に払われる周囲の敬意をほとんど気に掛けません。なぜなら、自分に栄誉

を授けるものは見る人にさらされることはないからです。したがって、閣下を意味するいくつかの言葉はすべて、国王が命じられた言葉の復唱に過ぎません。その榮譽を授けられた人自身には何一つその根拠はなく、ただ主人が創り出したものに過ぎません。

高潔この上ないファラモン王、小生には陛下が認めてくださった名誉も肩書きはあります。陛下にいただいた名誉を喜び、他人にそれと分かる名誉は辞退します。陛下、何卒小生の我がままをお許し下さい。小生は名声には控え目なのです。お分かりいただきたいのですが、小生は人々の賞賛には冷淡なのです。

謹白

ジャン・シェリュイ

前略

乏しい資産しかなく非常に控え目な人物が社会に出て行くのはどれほど不利であるか、しばしば自信のなさを露呈し、過ちを犯すのではないかとの不安からどれほど不正な手段をとるか、すぐにでも魅力となるはずの立派な美德と才能が完成の域に達する過程で主要な障害になるのはどれほど残念なことであるかは、貴殿に申し上げるまでもありません。

実は小生がこのケースに相当するのです。小生は田舎の学校で教育を受け、ラテン語とギリシア語を学びました。家に不幸な出来事が起こったために、上京せざるを得ませんでした。町でより洗練された仕事に就いたことで、不名誉と貧困にさらされずに済んでいます。現在はある弁護士の書記をしており、仕事の合間を利用して、イタリア語とフランス語を習得しました。仕事は順調で、それなりの信望は手に入れましたが、日々これは一生の仕事ではないという思いに駆られています。

小生が今お世話になっている方は、その方の力だけでなく心から、公的な仕事で外国を行き来しているある紳士に小生のことを推薦してくださっています。この手紙が活字になりますと、小生が話し掛ける自信のない人たちに注目していただけることになります。貴殿は人の幸福を妨げるようなことはなさらないものと期待します。

1712年 9月 9日

草々

エム・ディー³⁾

第481号 1712年 9月11日 (木曜日)

【アディソン】

ビトとバッコスはいあまりいい縁組ではなく、
嘆願を始め、二人は法廷へと駆け込んだ。(ホラティウス)¹⁾

3) この手紙の筆者は、リンカーズ・インの著名な不動産取引専門弁護士ロバート・ハーパー。

1) ホラティウス『諷刺詩』1.7.19-21

時々、同じことでも人によってとらえ方が異なると考えると楽しくなります。身分の低い人がしばしば身分の高い人が見向きもしないことを重んじるとすれば、その逆に、身分の低い人が重きを置かないことを、身分の高い人が重んじることが沢山あります。とりわけ、庶民は公的な儀式の細目について偉い人たちが交わしている論争を耳にすると大変驚き、些細なこととしか思われえない事柄のために、結果が先延ばしになっていると聞くと不思議に思います。私は、まだ最初の夫が活着しているのに再婚したある徳高い女性の細やかな嘆きを描いているサザン氏の芝居に登場する門番の裁定にとっても満足しています²⁾。死んだものと思われていた最初の夫が、悲劇的なことなのですが、長期の不在後に帰って来て困った事態が生じるのです。乳母と門番はこのとき起こる厄介な事態について話し合っているのですが、正直者のサンプソンは、とても賢明なことに、元の主人が活着しているのなら、「彼は再び自分の馬を手に入れた」という昔の格言³⁾にしたがえば事態は簡単に解決することが出来ると思います。今日では、非常に多くの国々の賢明な頭脳を集め、ヨーロッパが気をもませる事態になっている、レヒテラン伯とムッシュ・メスナジェの現在の論争ほど、わが同胞の大半を驚かせ当惑させているものはありません⁴⁾。

昨日、コーヒーハウスへ行き、並みの政治屋さんたちが取り囲んでいる隣のテーブルに耳を傾けていたとき、その内の一人がとても念入りにニュースを読んでから、突然つぎのように言いました。ユトレヒトでの従僕間のこの不幸な不和はキリスト教国の平和を遅らせるのではないかと彼は言います。教皇が一枚かんでいなければいいのだが。最近気の毒なスイスの各州が犠牲になったように⁵⁾、教皇は分裂を助長するのが非常に得意なのです。ムッシュのいわゆる従僕たちが和解しなければ、この反目を終わらせるには宗教戦争しかないと思う、と。

彼の隣に座っている知ったかぶりの男は、もし私がフランス王だったら、どちらの従僕にも味方しないのだが、と言います。ムッシュ・メスナジェの家来が頭に傷を負ったためにヨーロッパの全機能が止まっているのはこのためです。レヒテラン伯がみんなに酒でも振舞っていたら、こんな大騒ぎにならずに、万事うまく行っていたに違いない。だが、彼らが言うには、レヒテラン伯は激しい人で渋面をされるのが嫌だということです。

このとき、それまで黙っていた男が口を開き、自分はわがキリスト教国の君主たちの全権大使がこの一件を真剣に考えていることにとても満足していると言いました。というのは、従僕は近頃の従僕ほど生意気で尊大ではなく、また、公務に偏見を持っていないとすれば、彼らが和平条約で鼻をへし折られるのを見ると嬉しくなるから、ということでした。

テーブルの向かい側に座っており、フランス王に味方していると思える男が、みんなに

2) トマス・サザン (1660-1746) 『不運な結婚』 (1695) 5幕1場。

3) 「万事申し分なし、彼は自分の馬を再び手に入れた」 (事がうまく納まって万事めでたしめでたしであるとの意) 16世紀中頃のことわざ。

4) フランス全権大使メスナジェとオランダ全権大使レヒテレンの論争。和平交渉の行方を心配させ、1712年8月から9月にかけてイギリスの新聞にしばしば登場した。

5) スイス各州でのプロテスタントとローマカトリックの諍い。第452号参照。

向かって、フランス王はムッシュ・メスナジェの従僕が危害を加えられたからということ、立腹しなかったのだから、あなたたちはこの一件を正しくとらえてはいないと言いました。王にとってムッシュ・メスナジェの従僕たちはどんな存在なのでしょう、彼らは王の臣下なのです。言って置きますが、フランスの臣下が鼻血を出し、王がそれに気づかないなんてことはとても奇異なことです。王は、名誉に掛けて、臣下を敵対行為から守る義務があります。もしオランダが国王に対して、とにかく王の庇護下にある人々を叩いたり蹴ったりするほどの横柄な行為を取るなら、王が彼らに事情を聞くのはもっともなことだと思う、とこの男は言います。

この特異な意見は論争に新たな光を当て、聞いていたほとんどの人がすっかり納得したように見えたが、オーストリア家の味方を表明する少々興奮した男がフランス王は臣下に目上の人に向かって渋面をするように助長し、その後で、無礼の罪から守っているとして、フランス王に厳しく襲い掛かりました。さらに、フランス人は渋面が常習となっているので、総会でそれを止めさせなければ、和平時に、とりわけ、西インド諸島の支配を続けている場合は、彼らは通りを歩かなくなるだろう、と付け加えました。この小柄な男はとても熱く、同盟国が自分の考えどおりであれば、フランス王には自分が刀のさやを納めるまでに、フランス人を火刑に処し、国内のプロテスタントを許容するように強いるのだが。彼はムッシュ・メスナジェがつまらない自惚れ屋だと言って話を終えました。

議論は今や大変熱を帯びてきて、いつ終わるか誰にも分かりませんでした。そのとき、法律の教育を受けて来たと思われる21歳前後の若者が議論に加わり、レヒテラン伯もムッシュ・メスナジェもこの件では間違っているとの意見を述べました。彼が言うには、レヒテラン伯は自分の従僕たちが侮辱されたのは間違いないと宣誓しておくべきだったのだ、そうすれば、ムッシュ・メスナジェは自分の従僕のお仕着せを剥奪するかその他最もふさわしいと考える何らかの手を打って、レヒテラン伯を公平に扱っていたに違いないということです。言って置きますが、もし誰から渋面をされても、私なら歯をへし折ることはしません。また、ムッシュ・メスナジェについては、自分の従僕が殴られたら、そうです、彼なら相手に襲い掛かったかも知れません。しかし、今こんな事態です、私の考えをお分かりいただきたいのですが、二人はこの件を調停者の手に委ねるべきなのです、と。

私はこの話し合いではいろいろなことを知りましたが、実を言うとほとんど啓発されることはありませんでした。なぜなら、この誠実な紳士たちから最終的に学んだことは、論争になっている問題は高度過ぎて、彼らや私のような頭の持ち主では理解できないことなのですから。

第482号 1712年9月12日（金曜日）

【アディソン】

ミツバチたちがあらゆる花の蜜を吸うがごとく。(ルクレティウス)¹⁾

人々の好みに合い、いつも以上に満足してもらえる新聞を出しますと、いつでもとても沢山のお便りが届きます。妻の尻に敷かれた男への助言をした火曜日のお話にはすでに非常に大勢の人たちから反応がありました。これはこの話がみなさんの役に立ち、既婚者の資産に関係したからだと推測します。チープサイドのある誠実な商人からはクラブの代理人として感謝の手紙をいただいています。この人が言うには、このクラブの会員は妻の許可があるたびに集まり、一緒に過ごすとのこと。私の新聞は会員全員にとって大きな慰めとなっているとのこと。そこで、ソクラテスについてもっと詳しく説明をして、当時の人たちに彼が市民だったのか廷臣だったのか、クサンティッペを埋葬したのかなどなどの詳しい事情を知らせて欲しいとのこと。というのは、ソクラテスは彼の発言からするととても聡明な人で立派なキリスト教徒だったように思えるからということです。口やかましい女と一緒にいるベンジャミン・バンブーと名乗る別人は、私が先週の火曜日に述べた合法的なやり方で彼女を従順にしようと努力して来た、そしてまた、怒りに駆られて、しばしばブラクトン²⁾が認める以上の事態になったことがあると言っています。だが、今後は自制心と学問を身につけた人物のように耐え、彼女のことはひたすら哲学を教えるために一緒に暮らしている者と考えことにすると言っています。トム・ダバウィットは、私が結婚状態は天国か地獄のどちらかだと断言している最後の文章以外は全面的に私の意見に同意すると言っています。トムはこのとき、経験的に、結婚状態は天国でも地獄でもなく、むしろ、煉獄という名で知られている中間状態であると告げる責任があります。

同様に、女性たちも意見を述べてくれて私を喜ばせてくれます。エウテルペと名乗り、文人と思える婦人は、各家庭にサリカ法典を制定することに私が賛成かどうか、夫が軟弱で無学な場合、分別があり学問を積んだ女性が実権を握ることは駄目なのか、と尋ねています。これとはまったく正反対の性格の別人は、クサンティッペの署名をして、自分は名前どおりにすると言っています。世知に音痴な学究肌の人物と結婚しているので、自分がすべてを切り盛りし、夫がかび臭くなり、お付き合いに不向きにならないために、時々はっぱをかけざるを得ないということです。

以上何通かの手紙は抜粋だけに留め、一通だけ詳細に掲載したいと思います。

観察者様

貴方は、妻の尻に敷かれた男の呼称にふさわしい夫について生き生きとした描写をしてくださいました。でも、これと全く正反対の性格の夫については触れられたことがないものと思います。イングランドの各地でこういった夫は「女の仕事に精を出す男」³⁾という名で知られています。私は不幸なことに実際には私以上に女性である人と生活を共にしています。彼は甘い母親の薫陶を受けて育ちました。その結果、彼は母親に負けない立派な

1) ルクレティウス『物の本性について』3.11

2) 第479号参照。

3) 「家事をする男」は英語では cotquean。OED では1825年が最後の引用。

主婦となったのです。彼は育児室から出て2年もしないうちに、アنزの砂糖漬け、ゼリーを作ることが出来ました。彼は風邪を引いてはいけなからということで、一度も海外に行く許しが出ませんでした。雄鹿を追い詰めたときには、母親の傍で味付けの仕方とかパン粉の付け方を学びました。ほかの若者が海を渡る、つまり、外国旅行をしているときに、姉妹と紙の舟を作っていました。彼は貴方が見たこともないような白い手をしており、イングランドのどの女性よりも上手にパン生地を膨らませます。こういった技能があるために、彼は哀れな夫となっています。いつも台所にいて、始終料理女と言いつ争います。執事の会計簿よりもミルクの勘定書に精通しています。彼が好みどおりになっていない料理のあら探しをし、食事を共にする友人たちに最高のクルミとかシカ肉のソースについて説明をしているのを聞くと、私は死ぬほどいらいます。こういった彼ですが、善良な夫でただの一度野鳥の焼き方に関して言いつ争いになった以外はこれまで喧嘩になったことはありません。でもやはり、正直言って、自分の領域でないことで女々しく忙しく立ち回るのではなく、時には私に厳しく当たるたくましい人になって欲しいと思っています。貴方は半ズボンを履く女性のことをお知らせくださったので、どうかペティコートを履く夫について何か語って欲しいものです。男らしさは女性においては滑稽ですが、男性においては女性らしさがそう言えるものと考えます。

草々

第483号 1712年9月13日(土曜日)

【アディソン】

神を登場させることを前提としてはいけない、
神にふさわしい用件でなければ。(ホラティウス)¹⁾

無慈悲な行為としては、隣人に降りかかる苦しみを罰であり天罰だと考えるほどひどいことはありません。苦しむ人が自分を天罰の対象と考え、自分のことをそのようなひどい見方で見る人たちの同情を排除するとき、その人の苦しみはさらにひどくなります。あらゆる不幸を天罰としてしまう気質は、間違った信仰心から生じます。信仰心というのは本来人々に対する善意を生じさせ、人々に降りかかるあらゆる出来事をこの上なく優しく解釈します。それゆえ、この場合、人の気質をひねくれさすのは信仰心ではなく、気質が信仰心をひねくれさせます。陰惨な考えとか嫉み深い悪意に満ちた気質の人たちは、どんな人生を送ろうとも、あらゆる考えや言葉や行為において、生来の心の特徴が現れます。最高級のワインにはしばしば土の味があるように、最も信心深い考えにもしばしばそこに至る心の解釈から特別な何かが引き出されます。愚行とか迷信がこの生来のひどい気質を伴って割り込んで来ると、これに取り付かれた人をとて馬鹿げていると思われないようにすることは信仰心をもってしても不可能です。

1) ホラティウス『詩の技法』191-2

ネメシスという名で身元は隠して置きますが、ある老婦人は私が遭遇した中で一番の天罰の発見者です。彼女は誰某の家に火をつける、あるいは、納屋を吹き飛ばすことがどんな罪か示すことが出来ます。彼女に天然痘で醜くなった若い女性のことを伝え、彼女は深いため息をつき、奇麗な顔のときはいつも鏡で顔を見ていたのだと言います。彼女の知人の一人に降りかかった幸運のことを伝えてごらんさい、そうすると、彼女は幸多かれと祈ります。でも、彼女の母親は姪の一人にとってもひどい仕打ちをしたのだと言います。彼女はしばしば、巨額の資産を有していたが、本人あるいは祖先の振る舞いに何らかの欠陥があったために資産を享受しなかった人たちを攻撃します。彼女は誰某が何故子供を持たずして死んだのか、誰某が何故不幸な結婚をしたのか、ある人が何故ある場所で足の骨を折ったのか、またある人が何故ほかでもない片刃の剣で亡くなったのか、その理由を告げることが出来ます。彼女は知人の誰かに降りかかることになるあらゆる不幸の罪を背負います。強盗とか殺人の話を知ると、泥棒とか殺人者の罪よりもむしろ受難者の罪について延々と語ります。要するに、彼女は立派なキリスト教徒ですので、自身の身の上に降りかかるどんな些細なことでも、隣人に降りかかるどんなことでもすべて天罰と考えるわけです。

日常生活では、この愚行を描写するだけで、それを暴きだすには十分です。だが、これが華麗かつ威厳をもって登場しますと、読者の心を当惑させ脅かすことになります。ヘロドトスとプルタルコスが、私が先ほど取り上げた老婦人と同じように無礼にもしきりに天罰を適用します。もっとも、彼らの語り方は愚行そのものを尊いものにしてしまっていますが。実際、大半の史家は、異教徒であってもキリスト教徒であっても、この根も葉もない迷信の話をし、不運や不測の災難や恐ろしい出来事について、まるでそれらが神の摂理の謎を知らされた結果であり、世界を支配している秘密の行為を知らされているかのように語っています。特にわが国の史家の何人かが意外な新事実を多く発表していると思われるに違いありません。わが国の昔の修道士たちは当時聖職者が所有していた権力や富を減じようとした王たちを安からに死なせることはほとんどありませんでした。征服王ウィリアム1世の子孫は、父が教会や修道院を取り壊したニュー・フォレストで天罰を知りました²⁾。要するに、こういった考え方をする著者の年代記を読むと、イスラエルとかユダヤの王の歴史を読んでいると思うに違いありません。そこでは史家が実際に鼓舞され、摂理の特定の計画によって、王が際立つかどうかは、真の神への崇拝を奨励するに応じて与えられる審判あるいは祝福によったのです。

私はこういった不幸のとらえ方は不幸が降りかかる当人にとって、とても無慈悲なだけでなく、不幸をもたらすと考えられている当人にとっても、とても無礼なことだと見なさざるを得ません。現世で徳高い人がしばしば不幸になり、邪悪な人が栄えるということは、今後懲罰に賛成する強硬な主張があります。現世において神の摂理の意図を遂行するために必要な善悪を、このようにでたらめに配分することが修正され償われるものと考えない

2) ミエージュ『グレート・ブリテンの現状』(1707) pp. 10-11 参照。

と、御業では限りなく賢明で善良だと思われる神にとって大きく矛盾することになります。それゆえ、通常の摂理では火が天国から落ちてくるとは考えられません。また、意気揚々とした罪とか落胆した美德を見るとき、全能の神は一方を守り、他方を処罰するために聖なるかいなをあらわにされるのです³⁾。双方の長所によって、聴聞と償いの日を別個に設けておけば十分です。

現世の天罰を何か特定の犯罪のせいにするという愚行は、いくつかの理由があるかも知れません。私はここでは2点のみ取り上げたいと思います。第一点目は、一般的に言って、天罰として、邪悪な人に降りかかったと思える災難とか苦しみはないということです。災難とか苦しみは折り紙つきの信仰心と徳を備えた人にも降りかかることがあるのです。無神論者のディアゴラスがアテネの船に乗り合わせたとき、激しい嵐が起きました。このとき、水夫たちがとんでもない不敬の輩を乗せたために、自分たちに天罰が下っているのだと、彼に言いました。ディアゴラスは水夫たちに同じ危険な目に会っているほかの船を見て欲しいと頼み、ほかのすべての船にもディアゴラスが乗っているのかどうかと尋ねました⁴⁾。私たちは誰でも同じ災難に会い、同じ出来事に遭遇します。そして、誰かが特定の苦しみに襲われているのを見るときには、それは苦しむ当人の罪からというよりも、人間の共通の運命から生じるのだと考えるべきです。

第二点目は、不幸に対する上述の解釈をする推定を阻止出来るのですが、つぎの点です。つまり、私たちは何が災難で何が祝福か知ることが出来ないということなのです。降りかかった人の幸福と繁栄に変わって行く多くの出来事が不幸として通っています。多くの失望が、結果としては、人を破滅から救っています。あらゆることの結果を調べることが出来れば、祝福であり天罰だと大胆に断定することが出来るかも知れません。しかし、部分的かつ最初の部分だけしか見ていないことについて意見を述べることは、道理に合わない軽率で愚かな行為となります。ビトンとクレオビスの物語は、異教徒たちの間で大きな評判となりました。この物語については、魂の不滅について記している古代のギリシア、ラテン双方の著者が引用していますが、この問題に関する警告を知ることが出来ます⁵⁾。ユノの巫女の息子であるこの兄弟二人は、儀式が行なわれるとき神殿まで母の馬車を引いて行きました。馬車を引く係りの者たちが不在だったのです。親孝行にうっとりした母親は女神たちに人間に与えられる最善のものを授けて欲しいと請願しました。すると、女神たちは二人をぐっすり眠らせました。翌朝になって見ると、二人は神殿で死んでいたのです。もしこれが反抗的な行為をした後で起こったことであれば、天罰と解釈されたと思われる出来事でした。そして、この物語の説明をした古代の史家たちもきっとそのように描写したに違いありません。

3) 『イザヤ書』第52章 第10節。

4) キケロ『神の本性について』3.37.89

5) ヘロドトス『歴史』1.31, プルタルコス『ソロン伝』27.5, 『モラリア』108F「アポロニウスへの慰めの手紙」。

第484号 1712年9月15日（月曜日）

【ステイール】

手助けしてくれるチャンスも後援者もなく、無名から
直ちに浮上するほどの明晰な才能の持ち主はいない。（プリニウス）¹⁾

観察者殿

仕事に就いているすべての若者のうちで、卓越した人物を守る肩書きとして謙虚な人を持つとうとする人は誰もいないと思われます。謙虚さがある種の長所を暗示するからというよりもむしろ長所を生み出すある種の障害となるからです²⁾。あらゆる職業の中でも、法曹界ではこの美德つまり謙虚さはとりわけ不必要だと思われますので、私はこの不利な条件を持ちながら法律の仕事に従事する人たちの救済に専念したいと思います。問題をさらに悪化させる点は、他の職業だと向上する人たちが、法律の勉強をしようと覚悟すればするだけ、学問に夢中になることによって、生来の謙虚さを強め、その結果、この道での昇進の障害を増してしまうことです。そのため、こういった人たちはみんな、強調して、「一生懸命働いて前へ進むが、気がついてみればますます目標から遠くなっている」³⁾人物と言えるかも知れません。若者が古代の人たちにとってとても好ましかったことが、何故現代の人たちにとってこれほど馬鹿げて見えるのかは、議論に値する問題になるかも知れません。今日では、何故謙虚さが若き初学者の誇りを守らずに、無視、圧迫させることになっているのでしょうか。謙虚な若者が年長者の功績を損なわないで、自らの昇進にとって不可欠の意見を述べるのが至難の業であることは、ウェストミンスター・ホールの列席者の誰の目にも明らかです。至極真つ当な発言を邪魔されるだけでなく、質問を取り上げられ、やっと手に入れた身分を頑強な廷吏によって押しのけられた若者を私は何度も目撃したことがあります。ところで、この職業の大部分はおそらく、「メッサラの力強い弁舌が欠けているか難解なカッセリウスほど読まれていない」⁴⁾人によって片づけられますので、もしこの職業の著名人が、謙虚さがその実践を妨げるほど法律の要領に迫るだけの研究に打ち込んだ若者をこの職業に手引きしたとすれば、人々を不当に扱っているとは私には思えません。そうです、先輩諸氏の間で好評を博す平静さと決断を発揮することによってその気質が定着し、訴訟好きの人たちがその騒々しい援助に不安を抱かなくなるまで、最初は啞者として紹介されることは、若者にとって不滅の感謝となるのです。弁護士風にお話をするとしますと、30歳くらいになると、老齢の弁護士と同じように優雅にかつ作法をわきまえて通常の動議を提出できるようになります。

私の意見では謙虚さの美点を強力に促進することは出来ません。この美德について述べ

1) プリニウス『書簡詩』6.23

2) ステイールはタトラー紙第52号で、ネストル（サー・クリストファー・レン）の性格について、謙遜は長所を伸ばすさいの邪魔になると言ったことがあった。

3) 『ベン・シラの書』第11章 第11節。

4) ホラティウス『詩の技法』370-1

ているさまざまな時代の優れた古代人の意見を調べてみるしかありません。ソロモンの時代まで遡りますと、好意は内気な人にとって必然的な結果となっています。当時の最も偉大な法律家であり最も洗練された著述家であったプリニウスは、その書簡の中で、非常に熱心に若者を推薦しています。そして、お気に入りの若者が自分と一緒に仕事をするという条件で、それ以外だと押さえつけられてしまうこの美点を引き出すために弁護人になるのを度々引き受けています。「話し始めるときは、最初は真っ赤な顔で、つぎに謙虚なために戸惑い、そのつぎに恐怖で死に掛かっているような表情を浮かべること」⁵⁾がプリニウスから立派な話し手の必須条件と見なされたことは、生意気な現代人にとっては大変な驚きかも知れません。シェイクスピアもまた、「臆して声もない忠実な心の控えめな態度に、臆面もなく押しつけがましく雄弁にしゃべりまくる舌以上のものを読み取ったのだ」⁶⁾と言うとき、同じように謙虚さに好意を寄せているのです。

さて、これら著者は話も表情もこの上なく混乱しているときでさえ、謙虚な人物支持を明言しているのに、わが法廷では何故大胆な発言や頑固なわめきがこれほど功を奏するのでしょうか。また、いかなる先輩も認めず、あらゆる反論も受け入れようとしない言動に対するこの確信が、この上なく謙虚な人が相手の思うままになっていると思われる賛成意見を敬意と忍従でもって懇願することよりも優勢を占めるのでしょうか。

現状は以上の通りですので、言ってみれば就くのに値する仕事に踏み込めない人たちに助言出来る最善の慰めは、法律の知識の獲得ひとつひとつを実質的な資産の増加と見なし、いつの日かこの架空の利得がもっと実質的な利得によって確実に日の目を見ると信じることです。どうかこの件について貴殿のご意見をいただきたいと思います。

敬具

この手紙の書き主が分別を備えている人であることは確かです。でも、この件について私はこだわりを持っています。なぜなら、謙虚さのもとでは、人は元気のない気弱さに陥り、自分や家族や友人、さらには国から永遠に取り残されることになることと述べたことがあるからです。きちんと目指すものにだけ注意を払い、ほかのことにも公平に対処できるとき、威嚇されたり誠実な大望を退けられたりするのとは、つねに教育あるいは勇気が欠けている結果なのです。私はしばしば、謙虚さは意志のなせる業でなくてはならず、つねに自制を暗示するものだと言って来ました。なぜなら、賞賛に値することをしたいという熱意があり、男らしくない内気さのために尻込みし、何も言わずに長所をしおれさせるなら、自分が登場する自信がないために、自分よりも拙劣な人が羽振りを利用する世の中に腹を立てるべきではありません。わが寄稿者が言うプリニウスの寛大さは、いくら賞賛してもし過ぎることはありません。長所の芽を育み、その生長を促すのは、高潔なローマ人および心の広い学者の立派な仕事でした。手紙で述べられている関心事は、世間の人々にとっ

5) プリニウス『書簡詩』5.17

6) 『夏の夜の夢』5幕1場 101-3行。

てこの上ない魅力です。でもこのとき、謙虚な人は立ち向かい、潜在している強固な意志を表に出さなくてはなりません。なぜなら、謙虚さへの賞賛は、長所が明示されて初めて可能なのですから。実を言いますと、現在は、知識を詰め込んでいる数多くの人々がないがしろにされている一方で、数少ない空虚なわめきちらす連中が弁舌の賞賛をさらって行くそんな時代です。私は「詰め込んでいる」と言いますが、もしその蓄えから尊敬に値すること、素晴らしいことを持ち出すと確実に人々のためになるのですから。私にはどうしても自分たちの考えを明らかに出来なくなるのか分かりません。正直なところ、チャールズ・フランクエアが堂々とした物腰で立ち上がり、美辞麗句を並べ立て、わけの分からないことを喋り、彼の厚かましさをうらやみ、彼の知性を馬鹿にしている、分別は10倍もある20人の内気な愚か者を押しのけているのを見たとき、私はとても愉快になりました。だが直ぐに、心中ではとても残念に思ったのです。法曹界、大学で賞賛に値するあらゆることの源泉が偽りの長所に汚され、このように傷つけられる人物を生み出しているのです。敢えて申し上げますが、話し掛ける最も偉大な人や最も素敵な婦人の前で最高のものを見せられなくしている教育は馬鹿げています。学問養成所でこれが賢明に修正されれば、生意気な気取り屋は自分が不釣り合いだと分かるはずです。しかし、オックスフォードとケンブリッジにおける雄弁の勉強で無口になるのを止めるまで、若い紳士諸氏の中ではこの偽りの謙虚さに耐えなくてはなりません。

第485号 1712年9月16日（火曜日）

【スタイル】

危険、さらには弱さがないことほど安心するものはない。

（クルティウス・ルフス）¹⁾

観察者殿

クラレンドン卿は、「つまらないことしか出来ないと思われている人ほど、危害を加えるものはいない。見掛ける人物が善を行なうにはあまりにも平凡な才能しかなく、それゆえ、危害を加えることは出来ないと信じることは大きな思い違いとなることがある。この上なく無力な人物が何かよからぬことを企むと、そこには悪意、思い上がり、熱意、さらには愚かさが備わる」²⁾と述べています。私が思いますに、読者にとってこの史家の意見の最大の逆説と思われる点は、一般に何も企てたり実行したり出来ないと考えられている愚かさは対象とされる人にとって手に負えないものになることです。このことは、ソロモンの言う「愚かな者は戯れ事のように悪を行う」³⁾を思い出せば極めて明白です。ソロモンはまたこの理不尽な人物の不興にさらされた人の悲惨な状況について、力強く「石は重く、砂も軽くはない、しかし愚かな者の怒りはこの二つよりも重い」⁴⁾と付け加えていま

1) クルティウス・ルフス『アレクサンドロス大王の歴史』7.8.15

2) クラレンドン『大反乱史』第3巻 79頁。

3) 『箴言』第10章 第23節。

す。この件に関する私自身の説明を抑えることは出来ません。要するに、聡明な人が理性にとってもっともらしくかつ類型化可能な方法で敵対者を追い込もうとするように、これと同じ根拠から敵対者は防備を固め、相手の努力から逃れるのです。だが、愚かな者は非常に矛盾した形で計画を立て、行動し、結論に至りますので、通常の方法では異常な企みを回避したり、裏をかいたりすることは出来ません。本日のモットーを敷衍して、私たちの不幸のいくつかはほとんど重要でないと思われる人物だけでなく、事態から生じるのだと言うことが出来ると思います。シェイクスピアは、ハンカチが無くなっただけでオセロをあれほど悲劇的かつ理不尽な言動へと追い込んだのです。そして、デズデモナはこの致命的なささいな物に注意を払わなかっただけで、あれほど残酷な目に会ったのです。もしすべての進取の気性に富んだ計画を入念に調べることが出来たら、熟慮したり懸念したりするに値しない出来事が介在していて、それが不首尾に終わった理由であることが分かるに違いありません。当然十二分な熟慮を必要とする瞬間や困難な時点での過ちが原因で不首尾に終わったのではないのです。誰か偉人の接見会に出掛けますと、その人が取るに足らない人々に異常に優しく接しているのが分かります。これは「誰かを無視するということは、役に立つあるいは危害を加えるその人物の力量を低く見ることから生じるに違いない」という格言に基づいているのです。そしてまた、その人物の能力に疑義を差し挟むとその人をその気にさせてしまい、そうすると、攻撃する力とか機会に事欠かなくなるに違いありません。誰にでも考える力があり、敵対者を中傷するためのちょっとした話をでっちあげたり、さらにひどい話にでっちあげたりすることが出来ます。自分よりも偉い人を隣人と同レベルまで引き下ろすことは無限の喜びですので、中傷話を聞くのが嫌な人は皆無です。おまけに、優秀な能力を備えている人々はこの偏見に苦しみます。おそらく何か危害を受けると、能力があるために、その人が危害を加えたのだと思われることになるのは確実です。人々および特定の人々が最も卑劣な人々から受ける攻撃について列挙すると冗長になります。

隣国にとってとても手強いフランスのアンリ 4 世は、初代バッキンガム公ヴィリアーズがフェルトン⁵⁾の非道を防げなかったのと同様、大胆不敵なラヴァイヤック⁶⁾の非道から身を守ることが出来なかったのです。重要でない事態や人物が偉大な人たちの進展にこのような強力な変革をもたらすことは、人の能力の矜持を挫折させなくさせる摂理に思われます。下位の人たちに強者は弱者を頼りにするという秘訣を漏らすことで、優位者の人間性と慈悲心を作動させるのもまた摂理なのです。

敬具

4) 『箴言』第27章 第3節。

5) ジョン・フェルトン (c.1595-1628) は、初代バッキンガム公を歩兵中隊の指揮権を授けてくれないうことで暗殺し、処刑された。

6) フランソワ・ラヴァイヤック (1578-1610) は、狂信的なローマカトリック教徒で、アンリ 4 世を暗殺した。

テンプル、ペーパー・ビルディング⁷⁾にて
拝啓

しばらく前に貴殿からお手紙を頂きました。小生の厚かましさをどこに向けたらいいのかお知らせ頂いていたので、直ぐにでもお返事を差し上げるところでした。でもこの件についてはお知らせ頂いたので、この巧妙な言い訳はもはや役には立ちません。この手紙では隣人のプリティマンを主人公とします。5月という月に関する観察者殿の説に同意している彼は、5月になると、女性に打ち込み始めたのです⁸⁾。そのありさまは以下の通りです。5月の初めに、彼が外出着にもなる豪華で人目を引くガウンを買い求めたことに気づきました。しかし、その衣服の用途がそれとなく示していたのですが、私は月末になるまで彼の目論見がよく分かりませんでした。お分かりのように、新しい衣服というものは、これを身につけた人の想像力を奮い立たせて自分が以前よりも立派になり、節制とか冷静さを払いのけ、女性に対する慇懃な振る舞いや色恋が出来るものと慢心させます。そこで、このように考え、5月という月の気分を漲らせて、この無慈悲な若者は女性の心を奪うことに決めたのです。最初は、彼は部屋に閉じこもり、時々ガウン姿で窓辺に姿を見せ、まさに思い煩っていると思わせる重々しさを示す気だるい態度を取りました。ある時には通行人に本を片手に横顔だけ見せ、またある時には惜しみなく全身を露にし、またある時には鬘を思慮深く払いのけて耳に掛け、魅力に変化を与えているのを見るのは愉快的ことでした。彼は人々がハンサムで陽気な人物と言う類の男です。彼の容貌はこの辺りでは誰をも虜にしまいます。日々上首尾であることに勇気付けられた彼は、征服地を拡張する決意をして部屋を出ます。私としては、ガウン姿の彼がこの辺り一帯に襲いかかるのではないかと懸念している訳です。

恋多き人物である私は、このことに憤慨しました。そして、当地区で鬘を購入することになりました。俗事からかけ離れている小生なら、より美しく、より素敵に見える白い馬毛がたっぷり使用されている鬘ははずしていたに違いありません。しかし、小生の置かれている状況はそれを許しませんでした。ところで、このハンサムな紳士に対する情熱はこのビルから動かないようですので、小生が振り向かせるのは極めて困難です。そのため、小生は大胆に自身の眉毛で持ちこたえ、ライバルと同じ構造の巨大な黒い鬘を準備することになりました。さて、これではおそらくライバルの賞賛者の数を減らすことにはならないでしょうけど、小生の抗し難い力によって通行人を分散させるチャンスは十分あるものと考えます。

このような微妙な危急の事態にいか振舞うべきか、ご家族の助言を添えた貴殿からの早急のお返事を期待します。ハンサムな美しい人に不利益になり、ハンサムな黒い人に味方する何か満足の行く解決法を与えてくださると助かります。

敬具

7) ペーパー・ビルディングは1607年に建てられ、大火で焼け落ち再建された。

8) 5月に関しては、第365号、第395号参照。

要注意：この手紙の書き主は黒い人で3階の住人であり、この人物が美しいと書いている紳士は2階の住人なり。

観察者殿

残念ながら、私は何とも言えません。

ロビン・ショーター

追伸：貴方が率直なショート氏の手紙⁹⁾にあまり関心をお持ちでないとしたら、少々困難だと思います。私は二人のうち、どちらが深い洞察力があるか皆さんに分かっていただくことを恐れてはいません。

広告

9月15日、ロンドン

乗馬服姿の騎乗の若い女性が、今月13日の夕刻、当町の1.5マイル以内の場所で観察者殿を見掛け、報いをものともせず駆けて行きながら帽子を取った。帽子には羽毛がついており、若い将校の物腰と雰囲気があった。そして支持者である観察者殿に何か言葉を掛けたのだ。そこで、通告する。もしこの人物の名前と場所、当該不快な人物の住所が分かれば、応報をするために知らせてもらいたい。情報提供者にはそれ相応の報奨金を提供。

第486号 1712年9月17日（水曜日）

【スティーラー】

こういったさもしい姦夫が嫌な目に会い、
彼らの気持通りに罰を受けることを願うあなたは、
必ずや満足するに違いない。(ホラティウス)¹⁾

観察者殿

私の知人にはソクラテスの信奉者、とりわけソクラテスが奉公人と言う結婚生活には喜びと苦しみすべてがあるという彼の哲学の信奉者が大勢います。実際、私たちはとても満足して、あの輝かしい人物を設定する際に、妻の尻に敷かれた男²⁾の友愛会全体に敬意を表していることを認めます。そしてこれは独り身であるという以外には長所を持たない生意気な連中のからかいを大いに防いでいます。ところで、大勢の人たちを注意深く観察していますと、女性が夫よりも愛人に対して一層横暴に君臨しているのに気づきます。女性の支配を完全に免れている人は千人に一人もいません。彼らは人生を楽しむことも出来ず、卑しむべき人物として呼吸しうろついているに過ぎません。私は私たち無害な兄弟を代表して、貴殿の支持を取り付けたいと考えています。妻の行状に屈服している私たちを公平

9) ショート氏に関しては、第473号参照。

1) ホラティウス『諷刺詩』1.2.37-38

2) 「妻の尻に敷かれた男」に関しては、第479号、第482号参照。

に扱うだけでなく、未婚の尻に敷かれた男に真の光を当てていただくことを希望します。私は彼女のことを言うのですが、心優しい女に完全に屈服している人物と懇意にしています。彼は私が彼の受ける虐待と彼女の横暴に抵抗出来ないことの証人であることは分かっていますが、それでも彼は私が妻に異常にへつらっているとって私のことをからかうのです。先週火曜日のこと、彼は愛人を訪ねるのに私を同行しました。以前に恥をかかされたと思える彼は、私を連れて行くことで彼女は自制し、徐々に一般的な話に入って行き、それで打ち解け、彼を苦しめた良心の痛みと屈辱を切り抜け、仲直りするだろうと考えたわけです。私たちが部屋に入っていくと、彼女はこの上なく冷たい態度でした。彼が私を親友の誰某だと紹介すると、彼女は私の挨拶には辛うじて耐えました。しかし、彼が非常に明るく私について来るようにと言いますと、彼女は彼の横面を張り倒し、惨めな臆病者、よくも私の顔を見ることが出来ますねと言ったのです。彼の髪と帽子は床のあちこちにころがりました。彼女は、彼が髪を被りなおせないほど素早く拾い上げ、階下に蹴り落とし、さっさと向かいの部屋に入り、蝶番が壊れると思われるほどの力でドアを閉めたのです。お分かりのように、私たちは顔色無く階下に降りて行きました。そしてこっそり外に出て、共に馬車に乗ったとき、ありのままの彼女のことを口にしたある紳士との闘いを彼がいさぎよく思わなかったために、彼女がこれほど腹を立てているのだと打ち明けました。しかし、優しい手紙を2通ないし50通も書けば、彼女の機嫌は直るだろう、と彼は言います。何故彼女と別れないのか、と私は尋ねました。すると、彼女のことはとても愛しており、彼女には短気さを忘れてもいいだけの魅力があるのだ、と彼は答えました。このように、この非嫡出の尻に敷かれた男はまさに自分の生活と名声を無視するあばずれ女を許し、彼女の評判に関する不名誉な異議を自分のせいに行っているのです。それでも、彼は、私が妻の言うことを聞き、危害を加えないようにしており、家族をないがしろにして道楽者がたむろしている危険な場所に近寄らないからということで、ずうずうしくも私のことを笑います。哲学者である貴殿は、私たちに代わって、御しにくい女に耐えるときは、彼女との不和が二人の血を引く子供たちの面汚しとなることを考慮し、そして、欠点が無垢な者に不面目をもたらすことを恐れて数限りない欠点に我慢しているのだということを強く主張していただきたいのです。長い受難の代価として、人生における貴重な事項を伴うこれやその他類似の事柄について述べる事が出来ます。しかし、伊達男の場合は、彼らに義務のない人からの虐待を我慢します。これは卑しい情熱がそうさせているのであって、克服することが輝かしいことであるに違いありません。

この種の人々は数多くいて、中には臆面もなく際立っている人たちもいます。そうです、彼らは死そのものもからかいの対象とし、自分に近い人々を寄せ付けないように家族の富と幸福を減じて、莫大な富を愛人のために残します。お墓での相棒になるしかないのです。確かにこれは尻に敷かれたことへの復讐なのです。突出した欺瞞の例はあまり多くありませんが、女たらしの情熱を抜け出せない運命を呪い、弱点が当然だと証明する雑多な詩から一文を引用するのを聞くほどありふれたことになっています。彼らがその積もりなら、私には何も言うことはありません。しかしその際は、自分は自由だと言い張り、私たち結

婚している哀れな受難者を笑わないでいただきたいものです。

この町のあるふしだらな女が愛人たちを堂々と支配し、海峡³⁾の船長とシティーの商人とハンプシアアの紳士に同時に囲われていること、そして連絡は彼女が個人的に雇っている人物が行っていることを知っています。連絡役のこの幸せな（彼はそう言うのですが）人物は、とても几帳面にこの女のためにすべての郵便を書き写すのでした。彼はガウンとスリッパ姿で腰を掛け、ただ名前を変えるだけで、誰々が悪党だというくだらない噂には根も葉もないのだと真面目に説明します。みんな立派な紳士なのだから、彼女がそんなにへりくだることはないと思うと言います。それぞれに同じことを書くのです。そして、秘書氏と婦人は整然とベッドに向かったのです。

観察者殿、手短かに言って、貴殿が遊び人は売春婦と同じくらい忌まわしい人物だと伝えられることが出来ないと、私たち夫はこれからの若者たちに異彩を放つことにはならないのです。ところで、これまで出会った中では、私はベティ・ドユーアルを推挙します。彼女は船員の妻であり、ある名士に囲われています。夫が航海中は、名士と過ごします。夫は帰って来たとき、何も尋ねず、自分のものでない贅品がある自分の部屋を目にします。そして、愛人は相手が海に出たとき、避難所に辿り着いた人のように喜びます。ベティは女性の中でも一番突出して満ち足りており、2人の欺かれた人物と2人の満ち足りた人物を同時に所有している当代唯一の女性として記録されてしかるべき存在なのです。

第487号 1712年9月18日（木曜日）

【アディソン】

睡眠が疲れた四肢に重くのしかかる間、
心は軽やかに動き回り、自由に浮かれ騒ぐ。(ペトロニウス)¹⁾

夢について書いている著者は大勢いますが、彼らは総じて夢を遠い場所ですでに起こったことの新発見、あるいは、将来起こることの前触れと考えています²⁾。

私はこの件について別の光を当てたいと思います。夢は、魂は優れているということ、さらに、魂が自立しているのだと知らせているのです。

第一に、夢は魂にとって自然な活動の素晴らしい例証であり、睡眠でこれを消したり和らげたりすることは出来ません。一日の仕事で疲れてへとへとになっているときでも、この活動的な部分は忙しく働き疲れを知りません。感覚器官がしかるべき休息と必要な修復を欲していて、体がこれ以上一体となっている精神的な実体について行けなくなったとき、魂はさまざまな能力を発揮し、体が再び元気を取り戻すまで活動を続けます。この場合、夢は、魂が体から解放されるときは魂のくつろぎと楽しみであり、魂が責務を休ませるときは魂の戯れと気晴らしであるように思えます。

3) 「海峡」とはバーミューダ諸島のこと。

1) ペトロニウス『サトゥリコン』

2) ベイル、Junianus Majus 参照。

第二に、夢は、心が体から遊離しているときは心の働きに自然な鋭敏さと完璧さの例証となります。魂は動きが重くて扱いにくい仲間と協力して活動するときには、その動きは邪魔されます。しかし、夢の中では不思議なことに、元気よく活発に力を発揮します。遅々たる喋りも自然発生的に熱弁となり、ほんのわずかししか知られていない言語で直ちに話に応じます。真面目な人がさかんに冗談を口にし、飲み込みの悪い人が当意即妙の機知に富んだやり取りをします。想像力ほど骨の折れる心の動きはありません。だが、夢の中では楽々と活動的で、私たちにはいつその能力が働いているか分かりません。例えば、誰もが何らかの時に、新聞、書物、あるいは手紙を読んでいる夢を見ます、そのとき、想像力が直ちに駆りたてますので、心が負担を覚え、それを別人の作文と見間違えるのだと思います。

この項目では、『医師の宗教』から一節を引用したいと思います。この書の中で聡明な著者は夢を見ているときと覚醒しているときの考えを説明します。「我々は眠りの中ではやや自分以上のものになります。体の休止状態は単なる魂の覚醒のように思えます。それは感覚の一時停止状態ですが、理性の自由と覚醒している考えは眠りの空想と結びつきません。私が誕生したとき、私の星位は水と関係のある蠍座でした。私の誕生の惑星時間は土星でした。そこで、その重たい惑星のかけらが私の中にあるのだと思います。私はどう見てもお祭り騒ぎが好きではありませんし、仲間を楽しくさせる気質も持ち合わせていないのです。だが、夢の中では、私は完全な喜劇を作り、その筋道を見守り、冗談を理解し、その奇抜な考えを笑うことが出来ます。もしそのとき私の理性が実を結ぶように、記憶が信頼に足るものだとしますと、夢の中でしか勉強しないに違いありません。また、ここで信仰する道を選ぶに違いありません。しかし、私たちのおおまかな記憶はうわの空の知識をほとんど理解しませんので、その話を忘れ、覚醒させられた魂に過ぎ去ったことを混乱した形で切れ切れに語りかけるしか出来ません。このようにして、人は時として、死の時間に、自分の及ばないことを喋り、判断することがあるのです。なぜなら、そのとき、魂は思考を開始し、死を超えた調子で話し始めるからです」³⁾。

同様に第三として、情熱は目覚めているときよりも眠っているときのほうが、強力に心に働きかけををするとも言えるかも知れません。喜びや悲しみは、ほかのいかなるときよりも、眠っているときに、より激しい苦痛とか満足感を喚起させます。上述の優れた著者がほめかしているように、信仰も同様に、体が休息状態のときの魂の中で高まるとき、異常に高揚し、掻き立てられます。これは気質が異なれば起こり方も異なるのはほぼ確実なことですが、誰でも経験することに違いありません。この項目についてはつぎの二つの問題点を指摘して締め括りたいと思います。この解答については読者にお任せします。もし夢の中では常に幸福で、目覚めているときには常に惨めであり、生活が等しく二分されているとすれば、幸福と惨めのどちらになるのでしょうか。もし夢の中では王であり、目覚めているときは乞食であり、結果として、目覚めているときに考える通りの夢を見るとすれば、

3) *Religio Medici* 第2部 第12節 (エヴリマン・ライブラリー編 pp. 84-85)。

実際には王なのか乞食なのか、それとも、そのいずれでもないのでしょうか。

夢で起こることに關しては、魂というものにとて高尙な考えを抱かせると思える事情がもう一つあります。つまり、夢の中では、魂の中に数限りないさまざまな考えが生起します。もしこの活動的な不眠の存在者が自らの存在を意識するだけだとすれば、眠りはなんと痛ましい孤独な時間になることでしょう。もし魂が眠っているときに、目覚めているときに意識しているように、ただ一人だと思うと、魂が自分は孤独なのだと夢見るときしばしばそうなるのですが、その時間は魂に非常に重くのしかかってきて、「彼女はただ一人、供も連れず、暗い見知らぬ道をさまよう」⁴⁾ ことになります。

しかし、これはついでながら口にしたに過ぎません。私がここで言っていることは、魂の素晴らしい力が仲間を作ることなのです。魂は自らが作り出した数多くの存在と会話を交わし、自らが作り上げた数多くの場面へと導かれます。魂自身が劇場であり、役者であり、見物人なのです。これは私に私が限りなく満足しており、プルタルコスがヘラクレイトスのせいにしている「目覚めている人たちには一つの共通した世界があるが、眠っている人たちはそれぞれ自分だけの世界に戻って行く」⁵⁾ という発言を思い出させてくれます。目覚めている人は自然の世界に親しんでいるが、眠ると、自分だけの個人的な世界に引き籠もるのです。この考えには、魂の自然な壮大さと完璧さを教えてくれる何かがあるように思えます。これは説明というよりもむしろ賞賛に値することです。

私は魂の卓越さを語る主張を無視するわけにはいきません。この主張はテルトゥリアヌスからの引用、つまり、夢の予知能力を見れば明らかです⁶⁾。いくつかの予見がなされており、誰が聖書を信じるか、あるいは、誰が史実に基づく共通の信仰をほんのわずかしき持っていないか、誰にも疑いを差し挟むことは出来ません。古今、聖俗を問わず何人かの著者にこの種の事例が数多くあります。こういった秘密の予感、夜の幻覚が、放心状態のときの魂に宿る潜在的な力、神との交信、あるいは、下位の心の働きから生じるのかどうかということは、学識者たちの間で大きな論争になって来ました。事実関係については議論の余地はなく、迷信も狂信も疑ったことのない非常に著名な著者によってそのように見なされて来たのだと私は考えます。

私はこういった事例に登場する魂が、完全に体から解放され足かせをはめられていないとは思いません。魂がさほど落ち込んでいなく、目覚めているときに体を動かす血と心の動きに巻き込まれ当惑させられなければ十分です。肉体の結合は心が自由に動くに十分なだけゆるみます。魂は自分の中に力をため込んでいるようで、体と協力して作動するときには、壊れて弱くなった活力が回復します。

私のここでの思索は、主張にはなっていないにしても、少なくとも魂の卓越さだけでなく、魂の体からの自立の強力な暗示になっています。そして、この思索はまったく反論の

4) 『アイネーイス』第4歌 466-8行。

5) プルタルコス「迷信について」(『モラリア』166C)。

6) テルトゥリアヌス(166?-220?)『魂について』46 テルトゥリアヌスはカルタゴのキリスト教神学者。

余地のないその他多くの理由によって立証されている以上の2つの大切な点の証明ではないにしろ、確認となっているのです。

第488号 1712年9月19日（金曜日）

【アディソン】

いくらかかるのですか？ 誓ってそれほどでもありません。

いくら捧げるのですか？ 何をおっしゃるのです、

4ペンス銀貨2枚ですよ、2枚です、ほんとに！（ホラティウス）¹⁾

日々受け取っています何通かの手紙から、読者の多くが私の新聞代は2ペンスではなく1.5ペンスを望んでいることが分かります²⁾。聡明なトマス・ウォーカー³⁾が言うには、私が彼の朝食の大半を奪っているとのこと。というのは、新聞代の値上げ以降、彼は毎朝、かつてはアルコールを加味したコーヒー⁴⁾よりも欲しがったスペクテイター紙もなく、コーヒーだけで済まざるを得なくなっているからとのこと。エウゲヌスは親切にも、これまで私の新聞が嫌になったと思うことはなかったのだが、最近どの新聞にも記載されている2語、つまり2ペンスという言葉に気づき、それを心から消して欲しいと言って来ています。石鹼製造人からも手紙が届いています。彼はとても親しみを込めて、この前の税制の改革以降値上げせざるを得ない私たち双方について、慰めの言葉を書いて来ています。そして、私がつぎに税について書くことがあれば、キャッスル・ソープへの現在の税について一言二言述べて欲しいとのこと⁵⁾。しかし、スペクテイター紙は6ペンスの価値があり、その値段でも百人を超える知人を保証すると約束してくれる寛大なフィロメデスほど良識を備え優雅な様子で書いて来てくれる人にはお目にかかりません⁶⁾。

同様に、女性からも大量に手紙をいただいています。本来、私は女性には大いなる敬意を払っていますので、この点に関する私の行動を認めてくださる人が非難する人よりも大勢いますことを知ってとても嬉しく思っています。娘さんが大勢いる一家からはとても丁寧な忠告をいただいています。彼女たちが言うには、値上げされてからというもの、父がスペクテイター紙の購読を止めたので、これまでのように毎朝スペクテイター紙があるなら、ティーテーブルではバター付きパンは無くてもいいと全員で父に申し出たということです。すると、老紳士は娘たちが自分たちの向上を願っていることに満足して、引き

1) ホラティウス『諷刺詩』2.3.156

2) 新聞代の値上げについては、第445号参照。

3) トマス・ウォーカーはチャーターハウス校の校長を49年間務めて、1728年6月12日に81歳で死去した。アディソンもスティールもこの学校で学んだ。

4) アルコールを加味したコーヒー（laced coffee）。コーヒーにブランデーとかラム酒を入れて飲んだ。

5) 戦費がかさんできたために、政府は借金を背負い、ロウソク、ビール、石炭、石鹼などなどさまざまなものの増税をした。

6) フィロメデスとは笑いを愛する者の意。第341号参照。

続きスペクテイター紙もバター付きパンも出すことにしました。ティーテーブルには毎朝いつもの献立表通りに、何も減らさずに出す指示をしたとのこと。これはこの立派な紳士の名誉となることですので、私はとても有り難く思いました。このことを知らせてくれた若いレティシア婦人から父の名を知らせてもらい、もし彼が嫌でなければ、当新聞に詳しく掲載することになります。

当新聞が読者の皆さんにもたらしめている出費を軽減する方策が見つかりますと有り難いと思っています。そのために、二つの点を考慮していただきたいと思います。第一点は、普段出費しているごく小さなことを切り詰めれば、今考慮中の一多半ペニーは簡単に浮くということです。婦人は朝の勉強のためにリボン1本を犠牲にすれば済みます。一家は夜つけるロウソクをいつもより1本少なくすれば、私的な事柄に危害を及ぼさことなくスペクテイター紙を購読することが可能になります。

第二点は、読者が小売で買わずに我慢すれば、税の負担がなく一括で購入することが出来ます。私の思索は、単独で購入されると、茎のついたサクランボと同じように、裕福な人たちにとって喜びとなります。大量に出回ってしまいますと、誰でも入手出来るものになってしまいます。実を言いますと、最初に登場するときにはある種の香りがありますが、時間、場所、人といった偶然的な事情がからんできますと、香りを失ってしまいます。この場合、時代の最先端に行く洗練された社会に追いついていくためには、無理をしないで半年遅れでもいいかどうかは読者が判断することです。私の新聞を扱っている書籍商には、現在、第3、第4巻が1万部ほどあります。この書籍商はこれを、第1、第2巻と同じように配置して発行する準備を整えています⁷⁾。彼はとても仕事熱心な人物ですので、しばしば葬儀用に提供される書物もありますが、これは洗礼や結婚や接客日⁸⁾とかその他喜ばしい儀式をする人たちにうってつけのプレゼントになると考えています。彼は一皿にまとめることができるほどの携帯できる分量で印刷します。そして、スペクテイター紙を載せたお盆は砂糖菓子を載せたお盆同様に、ご婦人方にもてはやされるものと考えています。

本日の紙面は最近スペクテイター紙の筆者宛に送られて来た短い諷刺詩で締め括りたいと思います。この聡明な著者には感謝する次第です。

前略

つぎの諷刺詩が大変評判になっていると聞いていますが、貴紙にはまだ掲載されていないのではと思います。わが桂冠詩人の賛意を見逃してはいけないと思います。真偽の程は分かりませんが、彼は貴紙を楽しみにしているようです。すでに貴方の手元に届いているかどうか分かりませんので、敢えてお届けする次第です。

7) これは1712年11月に出版された。

8) 「接客日」とは英語で visiting days。第24号参照。

スペクテイター紙について

テイト⁹⁾

あなたは新たに別人となって登場するが、

何も変わりはない¹⁰⁾。

最初、タトラ紙が無視されたとき、

グレート・ブリテンは検閲官の沈黙を嘆いた。

威勢のよい光を奪われた夜に涙を流した。

そのとき、スペクテイター紙が登場し、煌々と輝いた。

そして、最初の人が最初の日入を目にし、日が廻って

喜びが再び戻って来るまでため息をついた。

だが、二度目の太陽になんと名づけていいかわからない、

輝かしい後継者なのか、それとも同じことなのか。

そうだ、私たちは、今不安は解き放たれ、

思慮深く読む人たちは全員同意する、

同じ太陽であり、継承しているのだと。

草々

第489号 1712年9月20日（土曜日）

【アディソン】

深海の巨大な力。(ホラティウス)¹⁾

拝啓

貴殿の想像力の喜びに関する随想を読みますと²⁾、貴殿が明らかにしている喜びの源泉の中に、「巨大さ」が挙げられています。私にその理由を思い起こさせてくれました。私がこれまで目にした対象の中で、海つまり大洋ほど私の想像力に大きな影響を与えたものはほかにはありません。この桁はずれの海水が波打つ様子を目にしますと、穏やかなときでさえ、必ずこの上なく満足の行く驚きを覚えます。だが、これが嵐になり、四方八方の水平線が泡立つうねりと浮かび上がる山のような状態になりますと、その光景から生じるこれにふさわしい恐怖を言葉で描写することは出来ません。航行する人にとって、荒れた海は目にすることが可能な、動いている最大の物であり、その結果、想像力に巨大さから生じる最高の喜びを与えるのだと私は思います。正直なところ、私は、この海水の世界を見ると、必ず、最初にそれを注ぎ込み、受け止めるにふさわしい水路をこしらえた手につ

9) ネイハム・テイトがこのときの桂冠詩人だった。桂冠詩人には1692年に任命され、1715年7月30日死去した。後任はニコラス・ロウだった。テイトは『リア王』などの改作で知られている。

10) ホラティウス『俗歌』10-11

1) ホメロス『イーリアス』21.195

2) 「想像力の喜び」については、第411号から第421号参照。

いて思いを馳せます。これは形而上的な論証と同じように、自然に私の頭の中に全能の神という考えを想起させるのです、そして、その存在を確信させてくれます。想像力が悟性を刺激し、実体的な対象の巨大さによって、時間や空間によって制限を受けない神に対する考えが実を結びます。

私は何度か航海し、しばしば嵐に見舞われたことがあります。そういったときには、古代の詩人たちの描写を思い起こしたものです。ロンギノスがホメロスの一節を高く評価しているのを思い出します。ロンギノスが評価する理由は、ホメロスは才能の劣った著者のようには些細な空想には関心を寄せず、想像力を脅かしそうで、実際に嵐の猛威にさらされたときに発生する状況をつなぎ合わせていることにあります³⁾。これと同じ理由から、誰よりもいち早く詩篇作家が行っている嵐に遭遇した船のつぎの描写を私は気に入っています。「舟で海にくだり、大海で商売をする者は、主のみわざを見、また深い所でそのくすしきみわざを見た。主が命じられると暴風が起って、海の波をあげた。彼らは天にのぼり、淵にくだり、悩みによってその勇氣は溶け去り、酔った人のようによろめき、よろめいて途方にくれる。彼らはその悩みのうちに主に呼ばわったので、主は彼らをその悩みから救い出された。主があらしを静められると、海の波は穏やかになった。こうして彼らは波の静まったのを喜び、主は彼らをその望む港へと導かれた。」⁴⁾

ところで、詩篇作家の語り方は、道理をわきまえており、心地よいものになっているということでは、ウェルギリウスやその他の異教の詩人たちの考え方や変わりません。嵐を起こす神とそれを静める神が登場するのです⁵⁾。詩歌における崇高ということを考えて見ると、神が、地、水、風、火の四元素の中に騒動を起こし、その混乱を元に戻す、つまり、自然を騒がし静めるのだという考えほど気高いものではありません。

偉大な画家は、庭や森や牧場の風景だけでなくしばしば海の風景にも筆をふるっています。私は貴殿にその例をならって欲しいと考えています。もしこのささやかな素描が貴殿の作品の中に居場所を与える価値があるとしますと、私としては、ある紳士が旅行の締め括りに作った神聖詩をこれに添えたいと考えます。

I

ああ、主よ！あなたの僕^{しもべ}はなんと幸せなことでしょう。
あなたは確実に守ってくださるのです。
永久の知恵が導いてくださる、
そう、無限の力で救済してくださるのです。

II

見知らぬ遠くかけ離れた地でも、
あなたに守られて、

3) 『崇高について』10.3

4) 『詩篇』第107編 第23節から第30節。

5) 『アイネーイス』第1歌 50-156行。

燃え盛る地方の中を、私は火傷をおわずに通り過ぎた、
そして、腐った空気の中で呼吸したのです。

III

あなたのお慈悲があらゆる地を快いものとし、
喜ばしいものになさっています。
雪を置いたアルプスの山々も暖められ、
テュルスの海も静められたのです。

IV

ああ、私の魂よ！考えるのです、切に考えるのです、
恐怖をたたえた目でもって。
あなたは深淵をご覧になられる、
あらゆる恐怖が立ち込めてくるのを。

V

みな顔に混乱が宿り、
みな心に恐怖が宿る。
波また波が、深淵また深淵が、
舵手のわざを負かしてしまう。

VI

ああ、主よ！そのとき悲嘆に暮れる私は、
あなたのお慈悲によって救われるのです。
お祈りをしているという信頼に包まれ、
私の魂はあなたをとらえたのです。

VII

私たちは恐ろしい旋風に巻き込まれ、
砕け散った波間の上高く吊るされたのだが、
あなたが素早く聞き届け、
救ってくださるのが分かっていた。

VIII

嵐はおさまり、風は止んだ、
あなたのご意志にしたがって。
海は、あなたの命令で荒れ狂い、
あなたの命令で静まったのです。

IX

危険と恐怖と死の真っ只中で、
私はあなたの優しさをあがめる。
そして、あなたのお慈悲を称え、
さらなるお慈悲を心からお願いします。

X

私の命は、もしあなたがそれをお守りくださるなら、
あなたへのささげ物とします。

そして死は、もし死が私の宿命であるとすれば、
私の魂は喜んであなたの身元に行きます。

敬具